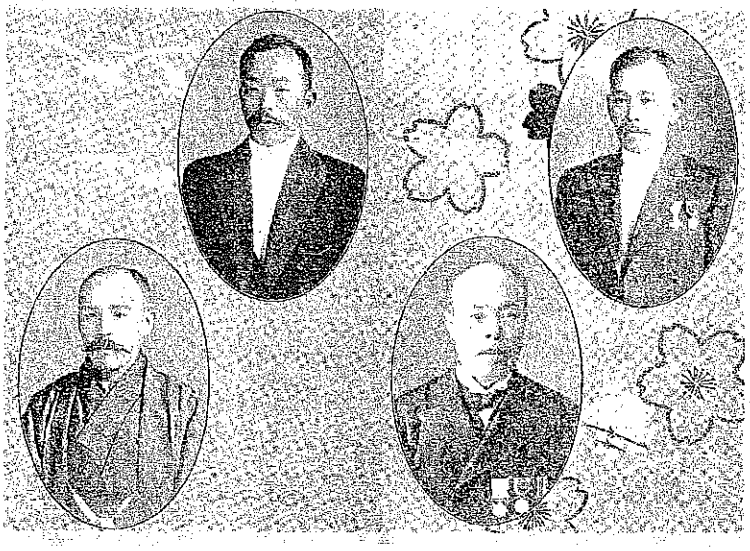
広郷土史研究会

会　報　第１１６号

事務局　呉市広公民館内
〒737-0706 広古新開２丁目 1-4
電話(0823)71-0706　FAX 73-5304
発行　平成 25 年９月 17 日
広郷土史研究会編集委員会

大正五年広島県賀茂郡私立教育会発行「賀茂郡志」発刊メンバー



第　号
25.9.21
広図書館
受付

写真は『賀茂郡志』より転載

大正５年４月 20 日に広島県賀茂郡私立教育会より発刊された『賀茂郡志』編纂主要メンバー。
右から賀茂郡私立教育会総理、富堅東十郎（賀茂郡長従六位勲六等）。
同会会長、藤田譲夫（賀茂郡広村長勲六等）。同会副会長、廣井以忠。
賀茂郡志編纂主任、土肥岸太郎である。
これには広水力発電所設立概要が記述され、明治 27 年来広島市の芳川顕正内務大臣を訪ね
協力を仰ぎ、藤田譲夫の尽力によって設立の機運を見たと述べている。（同郡志、567 頁）
また、子息藤田菊太郎が広島県会議員に当選した詳細もある。

（賀茂郡志提供、藤田正夫氏　　文、上河内良平）

目　　次

藤田家文書　第Q章を読み終えて
広水力発電所設立秘話と伝承不備の謎を解く　上河内良平・・・・・・・・・・・２頁
曾祖父「藤田譲夫」の名前の読みについて　藤田　正夫・・・・・・・・・・１６頁
広島県郷土史研究協議会（県史協）参加案内　事務局報告・・・・・・・・・・１８頁
写真展の開催報告・藤田譲夫と広島水力電気株式会社　吉田　顕治・・・・・・・・・２２頁
古文書部会報告・例会報告　同　２３頁

【広甘藍関連】

災害で苦しんでいた
広村を救った『広甘藍』

矢口　亥之吉
（やぐち　いのきち）
1875年2月7日（明治8年）－
1955年5月17日（昭和30年）
（80歳）

1875年広村大新開で矢口幸右衛門の次男として生まれる。
1887年広尋常小学校を卒業、阿賀村の三好氏に付いて米国加州へ出稼ぎへ。
明治20年代、米国加州よりキャベツの種を広村の実家に送る。

「褒状」第6回福岡代品評会で褒賞等賞

玉木　伊之吉
（たまき　いのきち）
1866年9月3日（慶応2年）－
1957年3月20日（昭和32年）
（没、満92歳）

広甘藍の生産、改良、販売統制に功績をあげる。
大正8年広園芸組合を組織し組合長に就任、昭和7年「広甘藍」を東京青果市場へ出荷、昭和13年広村会議員・区長・水利組合議員・産業調査員等の公職に就き自治の発展に貢献する。

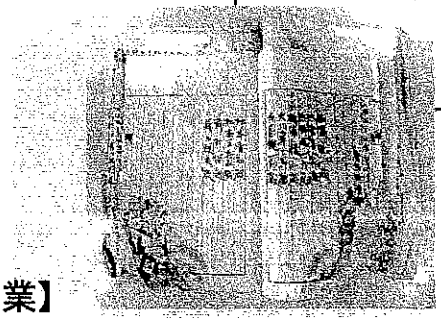
藤田　譲夫（ふじた よしお）
1850年9月15日（嘉永2年）－
1917年8月11日（大正6年）
（68歳）

伊藤博文に同行
二級の滝を使い水力発電

出資者を募り
廣島水力電気株起業

廣島水力電気株式会社
本店：廣島県廣島市
発電所：同県賀茂郡
出張所：同県安芸郡
■資本金総額:25万円
■出資者
澁澤榮一：300株
大倉喜八郎：300株
松本清助：300株
浅野総一郎：300株
松本万兵衛：200株
藤田譲夫：200株
野村　保：200株

牡蠣養殖を起業



【牡蠣養殖起業】

1894年5月設立
（明治27年）
10株の株式で創業

- 藤田譲夫　4株
- 佐々木孝太郎　3株
- 佐々木要三郎　1株
- 神垣常太郎　1株
- 楠市太郎　1株

大正2年頃
株式解散して個人経営

- 神垣新蔵　6株
- 佐々木光次　4株

観瀑園記の撰文を依頼する

【看瀑亭】

藤田譲夫広村長が水力発電所工事を見学するために建てた6畳2間の東屋。この場所は旧広島藩主が大瀧を見学する御上覧所であった所を買い求め付近に果樹を植え「観瀑園」としここに建設した東屋を「看瀑亭」と命名する。これを記念し旧広島藩主、浅野長勲公、政治家、東久世 通禧公が書を送った。

岡　仞人
（おか　せんじん）
天保4年（1833年）－
大正3年（1914年）
（81歳）

仙台藩士、幕末明治期の漢学者。天下に名を知られ門人3000人を養し、東京で漢学塾を営塾。
藤田村長に頼まれ「観瀑園記」を撰文。

東久世 通禧
（ひがしくぜ みちとみ）
1834年1月1日（天保4年11月22日）－
1912年（明治45年1月4日）（78歳）

江戸時代
幕末の朝
しかし文
朝廷の実
長州藩兵
壬生基修
逃れた。
元治元年

【廣島水力電気株式会社関連】1895年設立 日本国内でも最初の時期に設立された電力会社

品川 弥二郎
（しながわ やじろう）
天保14年閏9月29日
（1843年11月20日）－
明治33年（1900年）2月26日）
（57歳）

明治時代の官僚政治家。子爵。
天保14年9月29日、長州藩士の子に生まれる。
松下村塾に学び、高杉晋作、久坂玄瑞らと尊王攘夷運動に活躍。
大日本農会、大日本山林会、大日本水産会の創立。政府の勧業政策全般を指導。
産業組合運動の先覚者とされている。

伊藤 博文（いとう ひろぶみ）

天保12年9月2日（1841年10月16日）－
明治42年（1909年）10月26日）
（68歳）

武士（長州藩士）、政治家。
周防国出身。長州藩の私塾である松下村塾に学び、幕末期の尊王攘夷・倒幕運動に参加。維新後は薩長の藩閥政権内で力を伸ばし、岩倉使節団の副使、参議兼工部卿、初代兵庫県知事（官選）を務め、大日本帝国憲法の起草の中心となる。
初代・第5代・第7代・第10代の内閣総理大臣および初代枢密院議長、初代貴族院議長、韓国統監府初代統監を歴任した。
内政では、立憲政友会を結成し初代総裁となったこと、外交では日清戦争に対処したことが特記できる。元老。位階は従一位。勲等は大勲位。爵位は公爵。
アジア最初の立憲体制[1]の生みの親であり、またその立憲体制の上で政治家として活躍した最初の議会政治家として、現代に至るまで大変高い評価をされている。
ハルビンで朝鮮独立運動家の安重根によって暗殺される。

を求める

社起業目録見書

廣村
呉港和庄町

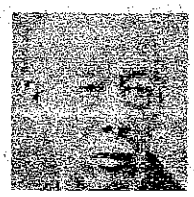
（1万5千円）
（1万5千円）
万5千円）〔広島〕
1万5千円）
（1万円）〔広島〕
（1万円）
（1万円）

藤田家文書より

澁澤榮一
（しぶさわ えいいち）

生誕 1840年3月16日
（天保11年2月13日）
現埼玉県深谷市
没 1931年11月11日(91歳)
職業：幕臣、官僚、
実業家、教育者

天保11年2月13日（1840年3月16日）－
1931年（昭和6年）11月11日）
幕末から大正初期に活躍した日本の武士（幕臣）、官僚、実業家。
第一国立銀行や東京証券取引所などといった多種多様な企業の設立・経営に関わり、日本資本主義の父といわれる。



松本清助（まつもと きよすけ）
広島の豪商

大倉喜八郎（おおくら きはちろう）
天保8年9月24日（1837年10月23日）－
昭和3年（1928年）4月22日）

日本の実業家。中堅財閥である大倉財閥（おおくらざいばつ）の設立者。明治・大正期の実業界の雄である。男爵。
後国新発田（現新潟県新発田市）出身。鉄砲商から身を立て、明治維新後は貿易会社、建設業に転身。化学、製鉄、繊維、食品などの企業を数多く興した。戊辰戦争、台湾出兵、日清・日露と戦争軍需によって大儲けしたことから死の商人、政商と呼ばれた。軍事関係の需要は三井・三菱を凌いでほとんど大倉組が独占したという。
晩年は公共事業や教育事業には惜しみなく私財を投じた。渋沢栄一らと共に、鹿鳴館、帝国ホテル、帝国劇場などを設立したことでも有名。東京経済大学の前身である大倉商業学校の創設者でもある。

末期の公家、明治時代の政治家。
廷で少壮の公家として尊皇攘夷を唱え活躍した。
久3年（1863年）、八月十八日の政変によって、
権が尊皇攘夷派から公武合体派に移ると、
に守られ、三条実美・三条西季知・澤宣嘉・
・四条隆謌・錦小路頼徳とともに船で長州へ
このことを世に「七卿落ち」という。
（1864年）、長州から大宰府に移された

浅野 長勲（あさの ながこと）
天保13年7月23日（1842年8月28日）－
昭和12年（1937年）2月1日）（95歳）

安芸広島新田藩第6代藩主、のち広島藩第12代（最後の）藩主。また明治時代から昭和時代初期にかけての政治家。浅野宗家13代当主。

おわりに

今回広島水力電気株式会社の設立には広村長藤田譲夫が深く関わって来たにも関わらず正史において同氏の名前が一行の記載もない、即ち明治30年以前の漏れが有ることをこの小論にて示した。今後関係諸機関の資料を訂正下さり藤田譲夫広村長の顕彰をお願いして筆を置きたい。

完

追記

ここでは「広島水力電気株式会社」の関連文章を掲載したが、広村発展の代表的人物のため広甘藍(ひろかんらん)関連も相関図に掲載した。

明治17年8月25日、呉地方は台風による高潮で大被害を受ける。呉町の被害報告では7尺（約2,1m）の津波に襲われたとある。広村は満潮時3尺（約1m）海面より低い干拓地であったため特に被害が甚大で新開地400町歩が全て3尺の海水に浸かった。その復旧後でも田畑は塩害で作物が作り難く村民が餓えに苦しむ状況に陥った。

このなか明治8年に広村大新開で生まれた矢口亥之吉は明治20年ころ阿賀町で結成された米国出稼ぎ団に加わりカリホルニア州ロスアンゼルス郡に渡りこの地で育っていたキャベツの種を実家に送る。

これを受けた吉松の玉木伊之吉が永年かかって品種改良を行い、塩分に強いキャベツ栽培を軌道にのせ広甘藍(ひろかんらん)と命名する。

藤田譲夫広村長は明治40年に広島県から、明治43年には内務省から模範村表彰を受けるが、これ以後、広村発展の農産物になった。

（『広郷土史研究会会報第94号』「広甘藍事始考（筆者拙論・平成21年11月刊）」参照）

注1：『中国地方電気事業史』著者、中国地方電気事業史編集委員会編。出版者、中国電力；広島（1974・昭和49年発刊）。

この著書（75頁～）に「広島水力電気株式会社」設立の経緯がかなり詳しく掲載されている。ただ記述時に1次資料が乏しかったためか明治30年以前の記録がない。

また、松本清助をはじめとする広島市側の出資者からの聞き取りで編集されたようで、広村側の発案者、藤田譲夫広村長の発電所建設経緯が欠落している。

今回「藤田家文書」第Q章「広島水力電気株式会社」設立に関する全資料（A4-396P）を解読して「広郷土史研究会会報第93号～第112号」に16回に分けて発表した。文書資料自体膨大な頁数になるのでここでは詳しい内容までは触れないが、会社設立から広島市・呉市に電柱を設置して送電するまでの諸経費まで記録されている。

明治28年6月からすでに会社設立の定款作成から発電所建設の土地購入等を行っているが、その中心人物は藤田譲夫広村長である。

この広郷土史研究会会報は呉市立中央図書館・同広図書館・広島県立図書館・広島市立中央図書館に1号～全て保管活用されている。参考にしていただきたい。

注2：『呉市史第六巻（995P）』（昭和62年発刊）広島水力電気株式会社に関する記事がある。「藤田家文書第Q章」が未発見の時期に記されたにも関わらず、広水力発電所建設に藤田譲夫広村長の関与を示唆する文章になってはいるが、この「第Q章Q-1」文書を利用して改めて書き直していただきたい。

注3：『賀茂郡志』編纂者、土肥岸太郎。発